

カラマツ中目材の利用について

— 協同組合上小木材の現状 —

協同組合上小木材 理事長 齋藤 敏

1 上小地域の概要

上小地域の民有林中人工林面積は、21,736ha で、人工林率は 55%でそのうち 31 年生以上の人工林面積は、16,200ha となっており人工林面積の 75%を占めております。

上小地域民有林の人工林面積を樹種別に見ると、カラマツ林が 12,343ha 率にして 57%、次いでアカマツが 24%、スギ林が 9%となっています。これは、標高が高く内陸性気候の「寡雨乾燥高冷地」に適した造林樹種としてのカラマツの植栽が奨励されたものといえます。

また、上小地域民有林の人工林の樹種別蓄積量では、カラマツ林で 314 千 m³、率にして 66%、次いでアカマツ林 17%、スギ 13%となっており上小地域民有林ではカラマツ人工林が重要な位置を占めております。

さらに、カラマツ人工林面積を齢級別に見ると、5 齢級以下が 749ha 率にして 6%、6 から 9 齢級が 9,524ha で全体の 77%を占めており、幼齢木と高齢木の面積は少なく、戦後に植栽されて植栽当時に予定されていた伐期を超えているが、主伐されていないままに残されているカラマツ林が多くなっている状況です。

上小地域の森林は、人工林の 57%を占めるカラマツを中心に成熟しつつあり、この森林資源を有効に活用することが、林業振興のために望まれております。

これを実現するためには、林業生産活動の効率化と、コストの低減が必要であります。また、林業生産活動を活性化するためにも、間伐材の有効利用を推進する必要があります。しかし、カラマツを中心とした間伐材の多くは、需要の少ない中目材が主体となっており、中目材の利用方法の整備と、需要拡大対策の整備が早急に必要であります。

2 設立までの経過

カラマツ材の建築用材としての需要拡大の道には厳しいものがありましたが、最初は土台角などの部門に進出し、さらに木材乾燥技術が定着する中で、長さ 4 mで末口径 22 cm以上のカラマツ材については、大断面集成材用ラミナや内装材として利用されるようになりました。

カラマツ小径木(末口径 14 cm以下)は、杭などの土木用材として利用されていますが、いわゆる「カラマツ中目材(末口径 16~22 cm)」については、効果的な活用方法が無いままに取り残されています。

中目材が活用されなければ、カラマツ人工林の間伐も進まず、上小地域のカラマツ人工林の荒廃は進むばかりとなり、自然環境の保全も難しくなります。

カラマツ中目材の活用は、上小地域の林業にとってなくてはならない問題ですが、市場経済下ではカラマツ中目材を製材することは採算に合わないため、計画しても実現できない状況でした。

そのような中で、上小地域のカラマツ人工林の健全化を願う人たちにより、協同組合上小木材(材を生産する森林組合と材を加工販売していく木材加工業者(5社))が設立され、カラマツ中目材を活用することを目的に、平成 12 年度に国の林業構造改善事業(県事業名:県産材供給体制整備事業)を導入して木材流通加工施設を整備しました。平成 13 年 5 月に供用開始し今日にいたっております。

上小木材では、これからの建築用材の需要動向、建築基準法の改正による性能保証に対応できる住宅部材、カラマツ材の特性及び中目材の特徴から、製品は集成材にすることとし、住宅用集成材

幅ハギラミナ(中断面集成材用ラミナ)及び間柱を製造することにしました。

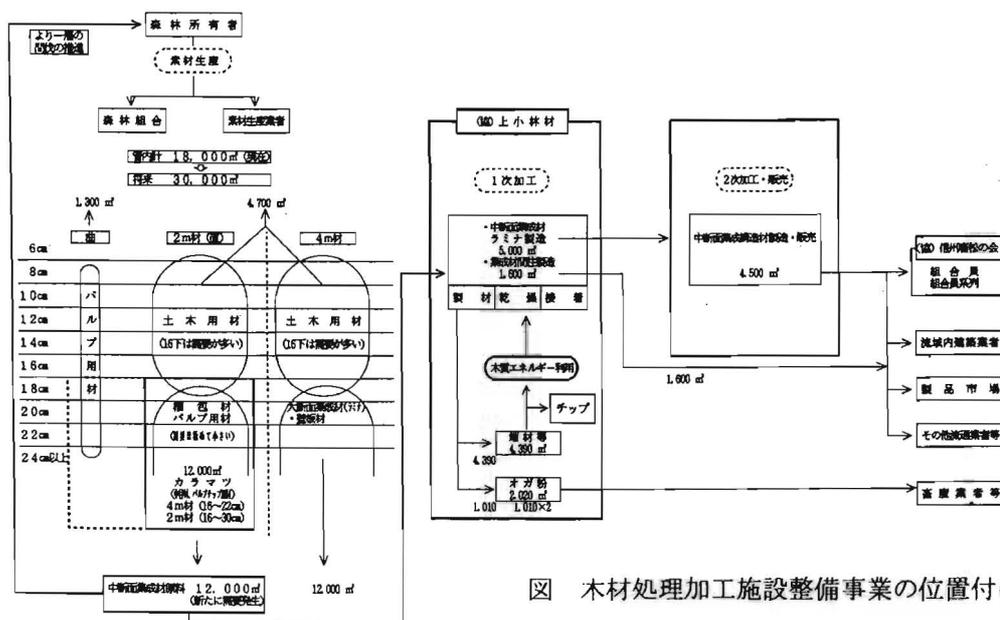


図 木材処理加工施設整備事業の位置付け

3 施設の概要

施設の概要は、木材加工流通施設の敷地面積 21,547 m²の中に、信州カラマツの羽目板、フローリングなどをふんだんに使用した木造の管理棟 1 棟 (183 m²)。作業用建物は信州カラマツや現場で発生したアカマツ材を利用した大断面集成材の木造建物 3 棟 (約 3,000 m²)。このほか木材加工施設一式、木質資源利用ボイラー施設一式など (表 参照) です。

この施設の年間原木消費量 12,000m³、製品生産量 6,6000m³ を目標に努力しております。信州カラマツの仕入れは、信州上小森林組合及び東信木材センターとなっております。

表 その他施設

施設区分	事業量	施設区分	事業量
帯鋸盤	2台	外構舗装	1箇所 3,567m ²
チップパー	1台	給水施設	1式
集じん装置	1式	電気施設	1式
乾燥施設	2式	搬送装置	1式
剥皮施設	1式	横はぎプレス装置	1式
作業用建物	3棟 2,999m ²	グレーディング装置	1式
管理棟	1棟 183m ²	フォークリフト	3台
貯木場改良・舗装	1箇所 3,506m ²	森林バイオマス等活用施設 木質資源利用ボイラー施設	1式

4 最後に

地域材である信州カラマツの間伐中目材をどう活用するかは 10 数年前からの大きな課題でした。この事業に踏み切るまでもにも組合員間で、不況下での巨額投資等を巡って種々な面からの検討が行われましたが、全力を上げて取り組むことで一致しました。

高品質な製品を作り、十分な活用を図り、集成材を含む木材を利用することが郷土の森林を立ち直らせる最も効果のある方法だと思います。繰り返しになりますが、木材の積極的活用のシステムを構築されますよう要望するものです。